

踏切の発明(虚述編)

20231210-20231229

踏切が発明されたのでこれからは町中に踏切が見られるだろう。

踏切の向こうにいるのが靴切り職人だったとしたら靴の内側に誰がいるのか聞いてみたい。聞いたとしても電車の音で答は聞こえまい。靴の中の亀は外に出てこないだろうし、唇の間に苔が生えてしまえば、靴切り職人ではいられない。列車が通り過ぎると靴切り職人の姿は見えなくなる。

踏切の向こうにいるのが水筒から水を飲んでいいる走者ならどこまで走り続けるのか聞いておきたい。この踏切で彼の疾走は終わりになるかもしれないからだ。空の木は木であり何も欠けていない。十疋を煮たので十疋までは売れる。門のあたりにいてほしい。この踏切で彼の失望は終わったり終わらなかつたりしたりしなかつたりだ。

踏切の向こうで絨毯をひろげて座っている異国の人を見かけた。山賊がその向こうで焚火をたいている。棘のささった真実の国を仄めかすのは見かけだけだ。烏賊の梵天を同じように叩いた。束を束にしたささやかな真珠は解答欄の玉も灰色にする。見かけたのだ。島の蔵には凡夫一同がするように仰向けになっていた。東の東ではしたたかな真の謎が解けている。そして、苔のはえた蘭は王が灰とした。それが異国の人だったのかもしれない。

踏切の向こうには、ライオンとその子供達がくつろいでいる。子供達はお互いに絡み合い、母親から離れようとしなない。母親は無表情に私を見ている。踏切があげばすぐにも襲いかかってくるだろう。子供はオンラインの達人だが心はうつろいやすい。踏切にかけられた梯子が格子になっている。裸の苺は難くはない。苺椿には表面が無く、私の目が必要だ。皺切りがあればすぐにも蟹烏賊を買ってくるだろう。洪水は予めライン川を越えて、人だかりがうれしそうだ。踏ん切りよく精子が核力をになっている。踝の疣は硬くはない。麦兜には母音がなく、支払日は必ず来る。麵切りはうまく精神の核心になっている。踵は原稿には足りない。麦酒の酵母の支払日は決まっている。それまでには列車が通り過ぎる。

踏切の向こうには老婆が横になっている。息をしている。目は閉じている。盗賊が金目のものを奪い、最初の向こう側に考慮する暇がなかったのだ。意見はある。耳は聞いている。盃の罅は金属の皿で物思いにふけるもへじを与えた。墨切りの回転はこのような法則が顎を虜にしたが、瑕はなかった。意味はあれだ。兎は問うている。盗賊は電車に乗って逃げ去ったのか。老婆はいつまでも目を閉じている。

踏切の向こうで子供時代を思い出している中産階級の婦人がいる。予備の寺院は鰓に足がある。中国階段の達人であるからには首からさげた名札にマッハに準じて奉る完全かつ十分な鰓がある。二十階を段々上がっていくと達するところが屋上である。今、名状しがたい隼を崇める寺院に紛れた思惑がある。これらは皆、犀を投げたり土をつけたりする只の匿名の集落である。発射時間は数分遅れたが恩赦がある。夜走る列車の窓からはさまざまな色の光が漏れている。

踏切の向こうでハーモニカを吹く笛吹鳥がたたずんでいる。蜂蜜で歯を磨く理由もない鳥には歯がなくただ終わっている。どんな歌を吹いてみようかと悩んでいるのだ。山の頂に虫が隠している歌は、歯もなく鯉の鼻の宇宙もない。実は終着駅までなら無料なので、鈍感な短歌で欠伸がでようとも脳はある。Eの頁の中に兎がした糞は、存在しない花園の自由な芋田はない。実数の最後には着払いの鍵を斜めになって撫でている科学者がいる。純心な炬燵の欠点は土曜の悩みである。遠くで列車の発車を知らせる警笛が鳴っている。

踏切の向こうに小さな蛇口がぶら下がっている。すこしずつ水が滴っているが、誰かが飲んでいるところは見たことがない。山鉦の口で鍋を飲み下すガッデムで酢を濾すたびに木が濁っていくが、話を許諾している頃合いに睨みはしない。出舵め。□を鍋で塗り潰せ。がってんだ。酒を飲み干し蜀が滅んだという話を聞いた。離れてもよい時、会いに来はしない。出始めは鶴が叱って殴り責めた。がんめんだ。配信が千回になるたび楔は決潰した。雛はとてもよい。合わせて一本。突破すれば縞馬が騙っていた塊の青みだ。元旦だ。配慮は迂回され、たび男は決断した。雛は痛い。合体だ。

踏切の向こうには膝が落ちている。踵かもしれない。近くの駅に落ちていた膝だ。嫁は落ち着いているので踝はかもしかだ。一斤の食パンに花はすこし痛い豚だ。落ちていた鯨が届いた。課題なのかもしれない。一人の斥候は著しく韭を恋した。落とし物札の緑線にはかもしかの果報はない。人を引けば排斥力が警察を呼ぶ。

★ここから確認

踏切の向こうにはトラックで運ばれた積荷がならべられている。荷物の容器はどれも同じ模様が印刷され少し震えている。遠くに聞こえる列車のモーターの音が怖いのだろう。陸上に運ばれた積荷はなだらかだ。植物は何物かの繰り返される問にいかようにも横綱の印籠をかかげる。小さい地震がある。猿にも聞こえる例の輩の毛夜の布切れを出す。幸せに蓮の花が咲積分はなんだかだ。直角であれば何でもよいかの繰り返言よ。問題は以下の通り。横線の印象を書け。小さい知識がある。峠から聞こえるのはイタリアの非売品。毛皮の呂布出陣。辛い蓮の化学が珍妙な責任問題だ。

踏切の向こうには映画同好会の面々がいる。斉藤と鈴木と宮下と玉田と長嶋だ。もう一人いたような気がするが誰もその人の名前を覚えていない。恥ずかしい絵と同じことをするのが好きだから会いに来たのだろう。お面をつけている。幕が済み、鉛水と下水管と五国の長種だ。すでに一人が痛いらしい。気のせいだが唯もうその傘の各雨は見えていない。聴覚が斜めになる絵と水平であることがよい。からだに会いに来た。麺はつけ麺だ。

踏切の向こうでは十五分前に発車した特急列車がこちらに向かって加速している。発病のため前列から落伍した侍は急いで隊列を組んだ。内向的で加熱ぎみだ。廃屋のない亀裂から落第した時、怠けないで豚裂きを頼んだ。肉向きの胃はカロリーの一勢いがある。特急列車が踏切に到達する前に各駅列車がその前を通り過ぎる。

踏切の向こうには脱線もどきが座っている。兎糞も時には座るだろう。それは兎とは異なる紙に描かれるだろう。からまった線路がときどき動いているように見えるがそれは兎のせいなのだろう。完了と量子の紙は猫をかわいがるので、まったく緑煙が届きはしない。うさぎは脱線もどきの内側から耳だけを覗かせている。

踏切の向こうには鯨のいない海がゆっくりと波打っている。駅のいなり寿司がお湯にびっくりし、博打にはまっている。訳もなく行司は風呂に入りびしょ濡れのような。博覧会では提灯行列を待っている。通訳がいなくては行列は風まかせ、縁菱暖簾のような。梅見会が提案型に裂けている。今年のお茶の取れ高は去年の二倍になるだろう。

踏切の向こうには概念としての点線が描かれている。俵の鯰と脇役の点描が細い。蛤の表面と協力者の氏名が書いてあるのだろう。おそらく点線に沿って踏切を切り離せるようになっている。小袖の娘のお点前は遅く、地熱課が発火するほどの沼さえ薙刀で切り落とせるようになった。少

量の狼に点火するほどほどに溶かした庵では切手が必要だ。緊急事態にはそれが必要なのだとわかる。

踏切の向こうには沿線の主要な駅が並んでいる。鉛の縁で王様は栗の杖の形を翻訳させた。普通の船の上では緑の土と羊は水曜の西の林の影と羽音がした。順番のある地図では、何かが同じなので、覚えるのは容易い。

踏切の向こうには標識があって、その指し示すものを考えることになる。投票は一度だけ。意識はない。指そのものがホストであると考え。指がなる。役人は家に妻が一人いる。漁は怠けていない。指定されたポストまで歩いた。指である。止まれだろうが進めだろうがポストまでいく。それでも目を開けとは言わないだろうか。

踏切の向こうには月の光の落ちる井戸がありその井戸の水が遠くの踏切の蛇口から流れ出る。月曜に米の落ちる囲碁大会があり、囲碁とは木が燃え吠える一切の蛇の口付けから流石なる。火曜には炎の街の大きな囲櫓が出会う。囲櫓は少なくとも自然なものを喰える一切れの鉋に口をつけて右に流れる。定は青く蚊を噛むための水曜なのか、難しい欲望なのかは知らない。もとは光だというのに蛇口からでるものは灰色でちいさい音がする。

踏切の向こうにははじまりと終わりがいて、町の誰もがその両方を嫌っている。同じ頃に始めてでも泣けばお分かりいただける。もったいないと唯言う野田の家老。町の頂きは台になりしかし粒子は分かれずいったん蹴る。はじまりも終わりもこの町に入ることはないだろう。交わりもなく灯もなく人はいなくなる。

踏切の向こうでは、忘れるわけのないことを忘れる。荒れて湧く汁もないならことさら荒れる。荒膚は汗をかいたら流れるだろう。荒れやすいものはすぐに流れてしまうから、離れずに残った何かを並べたいのだろう。それでも忘れなかったなにかは忘れられていないことに気づかないはずだ。

遮断機の発明が知られるようになったら、町は通りにそって遮断され誰も家から出られなくなるだろう。裁断機の発条の釦は撫でるように並んでいる。錫を桶にそそいで蜥蜴になり謎の豚が届けられた。泣くだろう。裁判機の廃止と鉛で蕪は売れるように立っている。湯を風呂桶にそって維新になり謙遜する腸には眉があった。粒子だ。我利缶の発病は船ではなく虎のような音がする。湯風呂で綿をそっと繊維にすると、町は通りにそって遮断され誰も家から出られなくなるだろう。